

〔書評〕

外村彰著 『念ふ鳥 詩人高祖保』

木田 隆 文

本書は外村彰氏の八冊目の著書である。

著者は一九九九年に立命館大学博士後期課程を満期で退学されたが、その前後からは毎年のように著書を刊行されている。研究者としてはまだ中堅前といったキャリアでありながら、これほどまでに多くの成果を発表できるのは、実に驚嘆すべきことであろう。

しかし誤解のないように言っておけば、著者の仕事は決して浅薄な量産主義に因るものではない。周知のように著者の主たる研究対象は岡本かの子である。すでにその成果をまとめた『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』（二〇〇五年 おうふう）を刊行されているが、そこには院生時代から発表された複数の論考に加え、大部な「全集未収録資料」および「岡本かの子読書・言及年表稿」が収録されている。この基礎資料に力点を置いた構成を見るだけでも、著者の研究が長期にわたる対象への向き合いと、その過程で蓄積された膨大な資料群の裏打ちによって生み出されていることが知れよう。ちなみに同書を中心とした成果によ

り、著者は今春、立命館大学より博士学位を授与された。まずはそのことを祝したい。だが著者はそれに慢心することなく、新たな成果として『撩亂の牡丹 かの子未刊随筆集』（二〇一〇年 菁柿堂）をも上梓された。題名通り花開いた著者のかの子研究は、長きにわたって耕された豊かな研究的土壌の賜物だったのである。

そして今回刊行された『念ふ鳥 詩人高祖保』も、また著者の腰を据えた実証的研究態度を十分にうかがうことのできる図書である。本書は著者の故郷、滋賀にゆかりの深い詩人高祖保の伝記であるが、この詩人について、著者はすでに「高祖保書目稿」「高祖保作品年表（一）（二）」などの論考や、「高祖保書簡集 井上多喜三郎宛」（二〇〇八年 龜鳴屋）で発表されており、今回のものがそれら継続的な研究の成果として問われたことが知られる。それに加え著者には、高祖と親交のあった滋賀出身の詩人井上多喜三郎に関する著作も二点ある（『近江の詩人井上多喜三郎』二〇〇二年、『井上多喜三郎全集』二〇〇四年、ともにサン

ライズ出版)。評者の知る範囲であるが、著者の井上多喜三郎への関心は、日本近代文学会関西支部編『滋賀近代文学事典』(二〇〇八年 和泉書院)の項目執筆にあつたかと思う。わずかな項目執筆に対しても調査の手を緩めることのなかつた著者は、井上多喜三郎の一次資料を発掘。そこから高祖の書簡を多数見出し、それが今回の成果へとつながっているのである。

実のところ、『滋賀近代文学事典』のかなりの項目が著者の筆によるものであつた。そんな滋賀の文学を知悉した著者の『念ふ鳥』は、高祖保の人生と詩業が明らかにされるだけでなく、その背景にある湖国の文学風土まで透視できる奥行きを持つものである。

やや背景に言を費やしてしまったが、ここからは本書の構成と内容を簡単に紹介し、思いつくままに私見を述べてゆきたい。

本書の核となる高祖の伝記部分は、プロローグ「牛窓の生家」と第一章「彦根に暮らす」では、高祖の誕生前後から幼少期が、牛窓・彦根での実地踏査や関係者への聞き取りをふまえて紹介される。続く第二章「詩と短歌と俳句」では高祖の詩的揺籃期である中学時代が、校友誌や投書雑誌、学校関係資料などから生き生きと描き出され、第三章「門」の前後」では、詩人として歩みだす高祖の姿を、同人誌「門」の消長とともに丹念に説明される。そして第四章「希臘十字」の刊行」では詩人としての頂点ともい

うべき「希臘十字」の世界が、著者の優れた評釈とともに究明され、第五章「高祖保をめぐる人々」では同時代の詩壇の雰囲気、高祖と詩人たちの交友関係を通じて浮かび上がらせていく。さらに第六章「母の死と結婚」、第七章「雪」まで、第八章「廻り澄むもの——「独楽」——」では家庭人としての高祖の姿とその生活の中で育まれた清澄な詩境が浮き彫りにされ、エピソードで伝記が締めくくられる。以上に加え、巻末には資料として「高祖保 略年譜」と「主要参考文献」、「あとがき」、「人名索引」が付され、読者の利便を供している。

これら全体を通読してまず唸らされるのは、その実地調査と資料調査の充実ぶりである。「あとがき」で示されるように、本書の基礎資料は高祖の令息、宮部修氏より提供されたスクラップや雑誌である。だが著者は周辺資料での補填・補強を怠らない。たとえば高祖の中学時代を描いた第一章・第二章では、彦根中学の「校友会誌」や学校資料、「中学生」などの投稿雑誌、「湖光る」、「赤い処女地」、「亜細亞詩人」の「てのひら」といった同人誌、さらには大本教の文芸誌まで、存在を確認することが自体困難な文献を多数利用、紹介している。そしてこうした書誌調査の成果が顕著に示されるのが、出発期の高祖を「香蘭」「門」などの雑誌から検討した第三章である。ここでは「門」が高祖の個人雑誌でありながら、多くの同時代詩人たちの結節点になっていたことが明

らかにされている。これは高祖の文学史的な再評価につながる指摘であろう。また「香蘭」などにおける高祖の活動は、同時期の湖国で展開した文芸活動の様態を知らせる貴重な報告ともなっている。

また、高祖の応召とビルマでの戦死を追ったエピソードは、資料の空白を埋めようとする筆者の熱意が感じられた。従軍体験はそもそも情報が伏せられるため、個人の軍歴を示す一次資料があつてもその実態の解明は困難である。そのため、傍証資料による推定が必要となるのだが、高祖の関わったビルマ戦線はその戦闘の激しさから特に資料が少なく、公刊戦史自体不十分な情報しか記されていないことが多い。にもかかわらず著者はその残欠情報とわずかな周辺資料を緋い合わせ、高祖の体験を具体化することに成功している。かつて評者は武田泰淳の従軍経歴を確認したことがあつたが、その資料の少なさをゆえに「従軍年譜」という体裁でしか報告できなかった経験がある。そうした体験を持つ評者にとって、第八章は特に学ぶべきことの多い箇所でもあつた。

そしてこうした著者の資料調査は、副次的に巻末の「高祖保略年譜」「主要参考文献」という成果を生んでいる。これまで高祖の年譜として主に利用されてきたものは、宮部修氏の手になる三頁弱のものであつた。それを思えば今回二十五頁にもわたる「略年譜」が付されたことは、今後の高祖研究に資するところ大であるうし、それだけで本書がいかに丹念に伝記事項を掘り起こしてきたのかを示しているだろう。また著者の文献に対する誠実な態

度は、九頁にもわたる「主要参考文献」にも感じられる。膨大な文献リストは、時に銜いを含んだものになる。だが本書のリストは高祖研究に必要な不可欠な情報が盛り込まれているばかりでなく、彼が属した「椎の木」周辺の動向、さらには同時期に活動した多くの詩人の動向を検討するうえでも重要な情報を提示するものとなっている。これら巻末の資料には、実証研究を自家薬籠中のものとする著者の面目が十分に示されているのである。

だが申し添えておかねばならないことは、本書がこれだけ研究書として堅実な方法をとつつも、血肉の通つた人間を描く伝記本来の魅力も忘れてはいないことである。それがよく表れているのは、高祖の家系と幼少期が描かれるプロローグと第一章である。ここで著者は紀行文の体裁を採り、感性によつて捉えられた高祖の姿を立ち上げようとしている。このあえて実証を排した手法こそが、かえつて高祖を育んだ空気をよく表しているように思うのだが、それはまた詩人の一面を持つ著者だからこそ成し得たことであるのかもしれない。そしてその著者の詩人としての感性がもつとも發揮されているのが、各章に織り交ぜられた詩の評釈である。時に高踏とされる高祖詩の世界に読者が浸れるのは、この著者の明晰かつ平易な評釈の導きによるところが大きい。だが一方、この著者の感性は、時にその詩の内容を越えた解釈を呼び起こすようにも感じられた。たとえば第四章で示された「湖畔集」の評釈。著者はこの詩の評釈に際し、初出表題に含まれる「アルバトロス」という言葉に注目、その言葉が持つ「天高く飛

翔するもの、というシンボリックな意味」に力点を置いて理解される。だが改めて、「湖畔集」での「アルバトロス」を確認すると、「夜かぜに湖へと畳み込まれる」「こゑ」のみが描き出され、飛翔のイメージは薄い。言葉が持つ象徴的意味と文脈上の意味、その差は著者の中でどのように埋められていたのであろうか。項末な部分ではあるが、「アルバトロス」の飛翔のイメージは、この箇所以後、表題の「念ふ鳥」という言葉と結びつけられ、高祖文学のキーワードとして頻出する。それだけに、なおのこと評者にはその小さな意味の差が引つかかった。

またもうひとつ評者が気になったのは、第八章の高祖の愛国詩への評価が留保されたことである。著者は高祖が「愛国詩」と「本然の詩」を「別個のもの」とみなしていた」とし、愛国詩集「夜のひきあげ」を「同詩集中の、好ましくない作は省く」という立場から検討する。しかし著者が切り捨てた「好ましくない詩」にこそ、実は高祖の戦争への向き合い方が示されていた可能性はなかったか。愛国詩を書く高祖と、家族に惜しげもない愛を注ぎ、軍隊の非道徳ぶりに憤慨する本書の高祖像とは相反する。だが彼に、愛国詩的な文脈で理解されうる作品があるのは事実である。高祖が「夜のひきあげ」それぞれの詩に含ませた内面を、著者がどう受け取ったのかも知りたかった。

だが全体的に見て、本書が著者の確かな研究手法と詩的感覚、そして対象への愛情が溶け合った良書であることは間違いないだ

ろう。

いい忘れたが、本書の優れた点は内容だけではなくその造本にもある。高祖ゆかりの彦根の名産、近江上布をあしらった表紙に、琵琶湖・牛窓湾の風景写真を配した前後の見返し、贅沢な料紙と版組など、高祖の高潔な人生と典雅な詩空間を見事に再現した造本は、著者と縁深い龜鳴屋の仕事である。同書肆はこれまで著者の図書を数多く出版してきたが、いずれも内容と書き手の意図を深く理解した優れたものであった。本書もまたそのひとつであるが、ただ惜しむらくは箱・扉・背の題字に一部誤植を残したことである。これは執筆者校正の範囲外だけに、著者にとって悔やみきれないことであろうと推察される。

だが完璧には魔がさすという。そして完璧のもたらず満足は人の歩みを止めもする。

著者がこの瑕疵をさらなる研究的原動力とされることを期待したい。そして今後もまた、毎年のように著者からの「ながい尺牘」が届くことを願うのである。

（龜鳴屋 二〇〇九年八月 四一七頁 本体価格八〇〇〇円）
（きだ・たかふみ 奈良大学講師）